

未知なる言語との邂逅

柳沢 民雄

1. はじめに

ほとんどの人たちが異邦のことばを学習するときには、その言語についての辞書や文法書が日本語あるいはその他の有力な外国語で提供されているのが普通であろう。さらにその言語を教えてくれる教師や先達がいることが当たり前だと考えているのではないだろうか。これは非常にありがたいことでもあるが、しかしこのように恵まれた言語は世界の中でも少数の言語にすぎない。他方、辞書も文法書もない言語が世界には多く存在し、それら少数言語はほとんど記述されることなく急速に消滅に向かっている。筆者はカフカースの少数言語を研究しているが、この地域の言語は上の恵まれた言語と全く記述されたことのない言語との中間に位置する言語が多い。文法書や辞書が存在する言語もあれば、ほとんど最近まで記述されたこともない言語もある。また当然のことであるが、これらの文法書や辞書の記述は満足すべきレベルに到達していないものも多い。筆者はカフカース諸語の中でも研究がある程度進んでいるアプハズ語を研究しようと考え、当初、簡単な文法書と辞書を手に入れ、テキストを独りで読もうと試みたが、ほとんどテキストがわからず呆然としたことがある。これはこの言語が複統合語といわれる動詞の形態が極端に複雑な言語のためでもあるが、何よりもまずその言語の学習のために必要な基本図書と方法論がなかったことがあげられると思う。勿論、今でもそのような少数言語にそんな便利なものはないけれど、もしそういったものがあれば西洋古典語を学習するのと同じくらいの努力で学習が可能であろうと思う。

ではそのような便利な学習基本図書や方法論がない言語を理解するにはどうすればよいかといえば、普通、現地のネイティブ・スピーカーから調査する方法をとるのである。こういったネイティブ・スピーカーからの調査方法は、少

数言語の専門家によって盛んに行われている。しかしネイティブ・スピーカーに頼れない場合、例えば死語研究の場合にはどのように研究するのであろうか。筆者にはそのような経験がないが、これには暗号解読にも似た困難さがつきまとうと想像される。また死語の研究ではないが、ネイティブ・スピーカーに頼れないという状況があろう。江戸時代の蘭学はこれに当てはまる。前野蘭化（良沢 1723-1803）¹らによる『ターヘル・アナトミア』の翻訳は、長崎の通詞の援助もあったであろうが、オランダ語学習の基本図書と方法論をもたなかった彼らが（翻訳を実質に行ったのは蘭化のみであるというが）、如何にオランダ語という未知の言語を解読したのかを窺い知ることができ、興味が尽きない。

筆者はかねてより、彼らがこの翻訳をどのようにしてなし得ることができたのかについて素朴な疑問をもってきた。この疑問に促され暇な折には関連書物を眺めることもあった。その中で岩崎克己著『前野蘭化』（全3巻、平凡社、東洋文庫、1996）はこの疑問に多く答えてくれた労作である。この岩崎氏の著書は昭和13年に（昭和58年に再版）自費出版されたものであるので、これ以後の蘭学研究において新たな発見もあろうかと思うが、これについて筆者はほとんど何も知らない。東洋文庫版では第1巻、第2巻が各「解体新書以前」（第1章から第6章まで）と「解体新書の研究」（第7章から第10章まで）、第3巻が蘭化の著訳篇と分かれている。この中の圧巻は、第2巻第8章の「解体新書の蘭語学的観察」での原文と翻訳の比較検討である。また特に貴重なのは第3巻の蘭化の著訳書の翻刻であって、ここに彼のオランダ語の研究方法を知る手がかりがある。以後、岩崎克己氏の著書（東洋文庫版）に依拠して、蘭化のオランダ語の習得状況と彼の解読方法を概観したい。もとより筆者は蘭学・洋学史については全くの門外漢であり、オランダ語その他わからぬ所も多い。御寛恕を請う次第である。

2. 前野蘭化のオランダ語文法の理解

外国語のテキストを解読するためには対訳辞書と文法の知識が必要である。前野蘭化が『ターヘル・アナトミア』を翻訳したとき彼は果たしてどのくらいのオランダ語の能力があったのであろうか。岩崎克己氏は、『ターヘル・アナトミア』の原文とその訳文を検討し、『解体新書』が『ターヘル・アナトミア』のほとんど逐語的な、また相当正確な翻訳であることは、『蘭学事始』に於ける誇大的とまで思われる苦心談と対比して、正に驚異的な事実と云って宜い。」（第

2 卷 73 頁) と述べておられる。また『解体新書』第 2 章の、*Occiput, het Agterhofd, strekkende van de kruin des hoofts tot aan den nek.* (A.a.2) 訳：「後頂者、従頂至下頂也。」の例を引き、「des hoofts なる属格を理解していたことも注目に値する。之れは翻訳者達が既に文法的知識を具備していた事実を立証すべき、有力な一資料であると思う。」(『前野蘭化』2 卷 101 頁) としている。これに対して、杉田玄白のオランダ語理解について、『解体新書』のクルムスの自序の翻訳から玄白の能力が分かるとした上で、その翻訳を「拙劣且つ誤謬を極めたものである」としている。(同著第 2 卷 75 頁)

蘭化の文法的知識が如何ほどのものであったかは、彼の著書『和蘭訳荃』(1785?) に若干の文法記述がある。また大槻玄沢の『蘭学階梯』(1783) は、「是等の書(『和蘭訳荃』と『字学小成』のこと、筆者)を修正増補して秩序を整理し、人に最も解しやすく作ったものであるが、畢竟は先生(蘭化のこと、筆者)の作を世に顕したものと云ってもよい。」(大槻文彦)(『前野蘭化』第 2 卷 201 頁) とのことである。岩崎克己氏もこう述べている：「(『蘭学階梯』は)即ちその標題の示す如く、蘭学の為の階梯であって、決して和蘭文法そのものの解説、乃至入門書ではない。」(第 2 卷 200 頁) 従ってこれらの著作からでは、蘭化の文法的レベルが如何ほどのものかはあまり分からない。蘭化の文法レベルを計るものは、蓋し彼が中心になって行った『解体新書』と『ターヘル・アナトミア』の語学的な対照分析であろう。岩崎克己氏は『解体新書』第 2 章の一部を原文と対照して蘭化の訳を検討している。例えば、*Truncus, de Romp of Stam, word gemeenlyk in drie holligheeden verdeelt.* 訳：「夫体者、幹也。分之為三等。」彼らの訳文から判断すれば、彼らは *romp, stam, drie* の語を理解している。ラテン語の *truncus* を理解していたかは不明である。*gemeenlyk, holligheeden* の訳はないが、動詞 *verdeelt* の意味は掴んでいる。しかし岩崎克己氏は、*word verdeelt* 「分けられる」の構文を理解しているかは疑問としている。(『前野蘭化』第 2 卷 99 頁) しかし全体に直訳ではないが文意は間違っていない。

3 . オランダ語辞書と蘭化の理解しえたオランダ語彙数

オランダ語の歴史はかなりの文法の簡略化を示している。例えば、現代オランダ語は冠詞の変化を失う傾向にあるが、江戸時代のオランダ語はドイツ語のように曲用(冠詞の変化)をいまだ保っていたようである(上の *des hoofts* なる属格形を参照)。しかしながら西洋古典語と比較すれば、全体にかなり孤立語

的な様相をしており、上記の van「から」や tot aan「ところまで」の意味を理解すれば、たとえ曲用の理解があやふやであったとしても、おおよその文意はつかみ得る。彼らの理解が那邊にあるかわからないが、彼らはこれを「従」と「至」と正確に訳している。従って、ある程度文法の知識があやふやであろうとも、単語の意味さえ分かればある程度文意を理解できたことと思える。そうとするならば、彼らが『ターヘル・アナトミア』を解説するにあたり、最も必要としたものは蘭和辞書であろう。勿論、『解体新書』(1774年上梓)の翻訳の際には『波留麻和解』(1796年)のような蘭和辞書は未だ出ていない。

岩崎克己氏は蘭化が理解できたオランダ語語彙数を試算している。まず青木昆陽より提供された『和蘭文字略考』(700語以上)、『和蘭話譯』等の合計1千箇以上(第1巻157頁)²、蘭化の長崎遊学において得た語彙数(『蘭学階梯』では六七百言、『蘭学事始』には七百余言、『蘭化先生伝』では五百語に過ぎないというが、岩崎克己氏はこれに疑念を抱いている³)、通詞西善三郎の遺稿蘭和对訳辞書(AB二三韻の未定稿にすぎないがこれを蘭化は長崎より持ち帰ったという)にある語彙、最後に長崎より持ち帰った蘭語辞書による語彙の獲得である。岩崎克己氏は、長崎より持ち帰った蘭和辞書以外の語彙による知識は極めて限られており、「結局は外国版の和蘭語積辞書の利用が不可避的となって来る。そして蘭化等は之を最大限度に利用した形跡が認められる。」(『前野蘭化』第1巻276頁)と述べておられる。長崎遊学においてどのくらいの語彙を通詞吉雄・檜林等から得られたのかは不明であるが、「百日ばかりも逗留し昼夜精一に蘭語を習ひ」(『蘭学事始』)という記述が正しいとすれば、蘭化が獲得した語彙数はそれほどの数には達しなかったと推測される。テキスト解説には岩崎克己氏が述べているように、オランダ語辞書を活用し、オランダ語の単語の意味を何とか理解しなければならなかったと想像できる。

4. 蘭化は如何にオランダ語辞書を活用したか

玄白は安永二年(1773)の建部精庵に送った書牘のなかで、彼らがオランダ語辞書をどの様に使用したかを記している。「扱和蘭書に辞彙の如き書有之候。マーリン、ハルマ、ハンノット、ロケース杯と申人の著し申候ウールデンプックと申書、多御座候。是によりて一語づつ工夫をめぐらし、筆を尽して暁解し、年月を重候得ば、自然と言葉数を覚え、段々読馴れ候得ば、風俗事体迄も相知申候。扱其書は、何の為に沢山有之哉と、御不審も可有御座候。彼地方の

風俗にて、諸国の言葉迄も覚へ、其国々の術芸をも学得候為に、異邦の辞に和蘭語を註釈し、和蘭語には異邦の語にて註し候書にて、二通りつつ御座候。其註釈を兼て訳家に習候言葉にて読合考合候得者、次第々々に相分申候。」(『前野蘭化』第1巻277頁) 岩崎克己氏によれば、当時には蘭・仏語の対訳辞書があり、「マーリン」と「ハルマ」はこれに当たるといふ(岩崎克己氏の挙げている書名の例:P. Marin. *Groot Nederduitsch en Fransch Woordenboek*. 1730. F. Halma. *Woordenboek der Nederduitsche en Fransche Taalen*. 1729)。蘭化が如何なる辞書を用いたかは不明であるが、蘭・仏語辞書を用いて彼は、「其註釈を兼て訳家に習候言葉にて読合考合」したのであろう。「其註釈」とは勿論、仏語を指すのではなくて、「和蘭語を仏訳する前、即ち夫々の蘭語の heading の直後に、和蘭語を以て解説が施されてある」(『前野蘭化』第1巻280頁)、その解説のオランダ語である。岩崎克己氏は、玄白の言う辞書活用法は、大槻玄沢の『蘭学階梯』にも同様な記述があるという:『蘭学階梯』に、蘭化が「彼ノ伝へ得ル所ノ僅ノ釈語ヲ拠トシ」ながらも、「彼此校考シ、已ニ知ル所ノモノニ因テ、未ダ知ラザル所ヲ推シ明シ」たと云っているのは、実に斯かる種類の釈辞書の、徹底的利用に結果するものでなければならぬ。」(同上)⁴

以上の蘭化の辞書活用法は、例えていえば中学生あるいは高校生のレベルの習得単語を用いて、本国で出版された英々辞典から未知の語の意味を探ることのように考えられよう。しかし上に述べたように蘭化の習得理解した語彙数というのは不明であり(それほどの語彙数とは考えられない)、我々が経験することであるが、ある程度以上の語彙数を理解していないときには、英々辞典というのはいささか役に立たないものである。

このような辞書活用法はいわゆる辞書活用の正攻法ともいえようが、恐らく蘭化はこの正攻法の困難に出会い、『仁言私説』⁵の中で彼が試みている方法によって、オランダ語の語彙数を増やしていったのではないかと私は想像する。

『仁言私説』の中で蘭化は、**barmhartig** 「慈悲深い」という語の類義語7語を挙げ、その7語について「第一釈」として解釈し、またその7語の各々の類義語を「第二釈」として解釈している。⁶これをさらに繰り返して「第八釈」まで類義語を挙げて解釈したものを羅列している。(『前野蘭化』第3巻83-107頁) 例えば、

Barmhartig, medoogend, verdraagzaam. 補 **genadig**, goedertieren, barmhertigh, ontfermigh, ontfermhertigh. (解釈が続く)

第一積 **Medoogend**, mededoogend, meelijdend, barmhartig. 補 meedoogend. (解釈が続く)

Verdraagzaam, lijdzaam, meegaande. 補 zagzinnig. (解釈が続く)

(genadig 以下 5 語の解釈が続く)

第二積 **Mededoogend**, zie medoogent, barmhartig, medelijdend.

(筆者註：この「補」というのは別の辞書から持ってきた類義語ではないかと推測される。)

岩崎克己氏は、「彼は“barmhartig”が「仁」の意味であることを承知していて、而も斯かる試みを敢えてしたのである。即ち既得の知識を以て未知の世界に踏み入るべき可能性の実験を、偶然此の単語に代表させてみたに過ぎないのである。」(『前野蘭化』第2巻205頁)と述べておられる。岩崎克己氏は、このような試みを「可能性の実験」と述べておられるが、私はこういった既得の単語を使いながらその類語によって未知の語の意味を知る、という方法こそ蘭化の語彙習得と語彙獲得の方法であったのではないかと考える。このようにすれば芋蔓式とまではいかぬまでも、かなり新しい語のおおよその意味を知ることができる。さらにこれをテキストや辞書の中で「彼此校考シ」ていけば、かなり正確な意味にたどり着けるのではないかと思う。このような営々たる努力によって蘭化のオランダ語の知識は、かなり高度なレベルに到達したのではないかと思われる。それは彼の晩年の翻訳『魯西亜本紀』(1793年)によっても窺われる。その一部を以下に引いておく：「慶長十二丙午年、コサッケンノ人 少「カサアル」少帝ピイテル、年十七ナルモノヲ立テ、四千ノ軍ヲ起シテ、カサン・アストラカンノ間、ウラルガノ河辺、許多ノ地ヲ侵シ、伐テ来テ、モスコウニ近ヅク。即チ先主テオドルスノ遺子ナルヲ、ボリス他ノ女子ヲ以テコレニ代へ、密ニ匿シオキタルモノ也ト称セリ。」(『前野蘭化』第2巻280-1頁)

註

- 1 大槻玄沢『蘭学階梯』(『大分県先哲叢書 前野良沢資料集第二巻』329-330頁)は前野良沢の蘭学の学びはじめについてこう書いている：「立成 東都城南 鉄砲洲ト云所ニ 蘭化先生ト云人アリ 医ヲ以テ世々中津候ニ仕フ 天資豪邁ニシテ 異書ヲ探リ 奇思ニ耽ケル 其性 世ノ未タ発セサル者ヲ発セントスルノ癖アリ 一日同藩ノ隠士坂江歐トイヘル人 蘭書ノ残編ヲ見セタリ 其ノ頃ハ絶ヘテ知ル人ナク

徒ニ奇観ニ供スルマデニテアリシガ 先生忽然トシテ謂ヘラク 彼レモ我モ耳目鼻口ノ人ナリ 同体ノ人ノ録スルモノ 何ソ読ニ得可ラサルコトアランヤ 其書ヲ読得テ コレヲ了解セントノ心アリ 幸ヒニ 昆陽子ノ在セルニ遇ヘリ 即チ紹介ヲ求テ其塾ニ就キ 日夜ネンゴロニ其ノ書ヲ学ヘリ 昆陽子 其志ノ厚キニ感シテ其蘊ヲ尽シテ伝フトイヘリ 是ヨリ先生 初テ彼ノ邦語辞ノ一端ヲ知り 手ヲ積スシテ務メラレシカトモ 千古未発ノ業ナレハ 容易ニ会得シ難ク 寤寝ニ勞シヌレトモ 更ラニ其事成ラサリシガ 其国君 賢明ニシテ 此学ノ益ヲ知り 其ノ道ノ開ケサルヲ嘆キ給ヒ 先生ヲシテ長崎ニ遊学セシム コレハ明和五六年ノ際ノ事ナリ」

- 2 斎藤信『日本におけるオランダ語研究の歴史』（大学書林、平成 60 年）によれば、『和蘭話譯』は、「オランダ語の短文四例を掲げ、その読み方・単語の説明と訳文をつけたもので、(中略) ごく初期の寛保 3 (1743) 年の著作である。」(9 頁) また著者によれば、青木昆陽には『和蘭文譯』という単語集があり、「全部で十集あったと想像されるが、現存するものは、そのうち三集・六集・八集・九集および十集で、訳 300 余りの単語が収録されている。『文字略考』と異なり、アルファベット順に、しかも単綴りの語から次第に多綴語へと進んでいる。ただし頭字だけで分類し、現今の辞典のように、二字目以後の綴りは問題にしていない。比較的後年に属するこの『和蘭文譯』は、一種の蘭日辞典の性格を持ったもので、現存しない一集・二集・四集・五集および七集の分を加えれば、総数は—もちろん現存するものからの推定であるが—約 500~600 語はあったに相違ない。従って『和蘭文字略考』の 729 語、『和蘭話譯』の 100 語を加えると、これらの諸著者中重複しているもの約 40 を差し引いても、彼が収録した単語は、総計 1400~1500 語に達したと考えられ、彼のその他の著作、例えば『和蘭貨幣考』・『和蘭櫻木一角考』などの著作を除外しても、前に掲げた『蘭學事始』の記述が、過小評価であったことはもはや疑う余地はない。」(同著 13 頁) と述べている。
- 3 斎藤信氏(同著 15-16 頁) もまた岩崎克己氏と同様に、長崎遊学によって得た語彙数について次のように疑念を抱いておられる。「昆陽の歿後、良沢は長崎に遊学し、「百日斗り」滞在し吉雄・檜林ら二・三の通詞家について学んだ。そして「七百余言を習ひ得彼国の字体文章等の事等も荒増し聞書して持帰り...」(『蘭学事始』) といひ或は「昆陽子伝フル所ヲ増益セラレシカバ漸クニ六七百ヲ暗記セリサレド章句ヲ解シテ其成説ヲ翻訳スルニ至リテ未タ企テ及ハス」(『蘭学階梯』<立成>) と述べているが、この数字は少な過ぎるのではあるまいか。さきにもふれたように、良沢

は 1500 前後の単語を師の昆陽から受けついでいたはずであるから、百日ばかり長崎に滞在して、「昼夜精一に蘭語を習った」良沢の収穫が高々700位の単語で、文を解する力もほとんど身につけていなかったとすると前二書の見解はあきらかに過小評価であったと言ってよく、長崎から帰って翌年の明和 8 (1771) 年から始められたいわゆる『ターヘル・アナトミア』の翻訳が、主とし良沢ひとりの語学力によって、しかもわずか二年たらずで行われたという事実の方が、彼の実力を物語っているのではあるまいか。」

- 4 大槻玄沢『蘭学階梯』(『大分県先哲叢書 前野良沢資料集第二巻』330頁)によつて、この部分をもう少し広く引用しておく。「先生 命ヲ受テ彼地〔長崎遊学のこと-筆者〕ニ至リ 訳人、吉雄 檜林等ニ交リ 昆陽子伝フル所ヲ増益セラレシカトモ ハカバカシキ業モ遂スシテ 東都ニ帰り 又其事ヲ勉勵セラレシカバ漸々ニ六七百言ヲ暗記セリ サレドモ 章句ヲ解シテ 其成説ヲ翻訳スルニ至リテハ 未タ企テ及ハス 是ニヨリテ再ヒ長崎ニ遊ンテ 毎事訳家ニ扣レシガ 前ニモ説ケル如ク 訳家ハ固ヨリ通弁ノ専業ニシテ 読書 訳文ノ暇ナケレハ 幾タビ討論シテモ 詳審ナラス 先生 此ノ由シヲ悟リ 訳家ニ秘蔵セシ彼ノ邦訳辞ノ書 並ニ医術ノ書 五六部ヲ請イ求メテ 東都ニ齎シ帰り 日夜手ヲ積ス 彼ノ伝ヘ得ル所ノ僅ノ訳語ヲ抛トシ 蘭人「マーリン」ガ収録セル所ノ訳辞ノ書ヲ取り 彼比較考シ 已ニ知ル所ノモノニ因テ未タ知ラサル所ヲ推シ明メ 稍ク其一ニヲ窺ヒ得タリ 歲月既ニ六七年ヲ経テ 豁然トシテ自得スル所アリテ 始メテ和蘭書翻訳ノ成業ヲ遂ケラレシトナリ」
- 5 斎藤信(前著:23頁)は、『仁言私説』について次のように書いている。「恐らく天明 3 (1783) 年以前の著述と推定されるもので、彼の語学研究法的一端を明らかにした特色ある小篇である。すなわち *barmhartig* (ドイツ語の *barmherzig*) という語が「仁」という意味であることを、吉雄耕牛の訳で知った上で、その語を原書の辞典で調べて、*medoogend* (慈悲深い)・*verdraagzaam* (親しみやすい・寛容な)・*genadig* (慈悲深い・親切な) などの同言語を見付けた。次にこれらの単語を辞典で調べ、能うる限りこれを追求してほとんど 100 語に及ぶ努力を重ね、その経過を刻銘に記述したものである。」また『大分県先哲叢書 前野良沢資料集第二巻』(大分県立先哲資料館編、大分県教育委員会、平成二十一年)の「仁言私説」の解説に次のように書かれている(151頁)。「天明三年(一七八三)以前の成立と推定される(『前野蘭化』)。長崎のオランダ通詞吉雄耕牛(一七二四～一八〇〇)の訳で *barmhartig* という語が「仁」という意味であることを知った上で、その語源をキリアヌス、ヤン

ロウイス、ビクロットンなど原書の辞典で調べ、medoogend(慈悲深い)・verdraagzaam(親しみやすい・寛容な)・genadig(慈悲深い・親切的な)などの同義語を見付け、これらの単語を辞書で調べ、可能な限り追求している。このような作業を百を越える単語について行い、その経過を記したものである。」また同書(口絵)によれば、「ヤンロウイス」という辞書の原書名は次であるという：Het groote Woorden-Boeck, vervattende den Schat der Nederlantsche Tale met een fransche uyt-legginghe. Door Ian Louys D'Arsty, Utrecht, 1643.

- 6 『仁言私説』の Barmhartig. の項は『大分県先哲叢書 前野良沢資料集第二巻』によれば次のように翻刻されている(153-154頁)：「私説ニ曰 barm.ハ魚名ニシテ本言ニ与ル所ナシ 古言ヲ考ルニ barmen ト云アリ 其説ニ云ク bearmen ノ意ナリト armハ困窮ナリ be ヲ加エレハ已ニ困メリ 已窮レリト云義ナリ en ト尾声ヲ転スレハ彼ヲ救フ意トナリ 則憐愍ト訳スヘシ 意フニ本言ノ barm ハ此義ヲ用ルナルヘシ ○hart ハ本、心臓ヲ云 通シテ心念トス ig ヲ添フル者別義アリ 今ハ事ニ感シテ発動スルカ為ニ 尾音ヲ転スルカ為ニ 尾音ヲ転スル者ナリ ○右二言合シテ 心常に存愛憐撫育ノ意トナル 蓋其心愛人利物ノ為ニ発動スルモノナリ ○[釈言] 其一ハ仁ノ義ナリ 其二ハ忠恕ノ義ナリ 其三己下五言ハ(本書訳スル所ノフランス言及 キリアヌス ヤンロウイス ビクロットン(皆言書名)ニ訳ス所ノラテン言 フランス言ヨリコレヲ採テ 茲ニ補録ス)皆仁ト訳スヘシ △釈言凡七 各逐次下ニ録シテコレヲ訳ス ○此言ノ条下註スル所ノ成語 天心人君ノコトニコレヲ云フ 今略之△吉雄子訳ス所ノ釈言ニ依テ訳曰 仁」

参考文献

岩崎克己著『前野蘭化』昭和58年5月再版

岩崎克己著『前野蘭化』全3巻、平凡社、東洋文庫、1996

大分県立先哲資料館編『大分県先哲叢書 前野良沢資料集第二巻』大分県教育委員会、平成21年

斎藤信『日本におけるオランダ語研究の歴史』大学書林、平成60年

杉田玄白著『蘭学事始』岩波文庫、1982

沼田次郎他篇『洋学 上』日本思想体系64、岩波書店、1976